

# 近世日本の儒者による漢詩文の制作と享受

## 在官・在野の区別に注目して

**本研究の背景** 十九世紀以降の日本で、西洋の学術・文化が選択的に摂取され、近代国家が構築された際、漢詩文の知識は重要な役割を果たした。**近代日本の文化的土台**は、どのようにして作られたのか。

**本研究の問い** 江戸時代の日本で、漢詩文制作の規範（手本）は如何にして定着し、流行・変化したのか。特に、作詩・作文の規範として**盛唐詩**と**唐宋古文**が広がりを見せたのは、如何なる要因によるものか。

**先行研究の問題点** 従来の研究では、近世日本漢詩の展開が西洋近代文学・芸術史による「古典主義」対「革新・個人主義」という抽象的な図式で説明され、近世日本の**社会的状況**、**人々の生き様**、**漢詩文が必要とされた場面**に即した理解が十分に得られていなかった。また、複数の学派を横断する視点からの研究も進んでいなかった。

**本研究の方法** 儒者の生き様に焦点を当てる。近世前期・中期日本の漢詩文制作は儒者が領導したとの前提に立ち、**武家に仕官した儒臣**と、**仕官せず主に民間で活動した****在野の儒者**に区別し、各人の立場や生き様と漢詩文の制作態度を関連させて考察し、漢詩文制作の先導者の推移を明らかにする。

### 近世日本における漢詩文制作の先導者の推移

